

道徳学習指導案

学習を通して培う国際理解の力
② 人権意識の涵養
④ 他国・異文化の理解、寛容性・礼儀、教養

学校名 釧路市立青陵中学校
 生徒 第1学年4組 男子17名 女子17名
 授業者 教諭 金子 雅人

1. 主題名 本当の幸せとは？（国際理解【4－（10）】）

2. 資料名 「小さな国際協力」（一部変更）〔中学校道徳 あすを生きる （日本文教出版）〕

3. 主題設定の理由

（1）生徒の実態

本学級の生徒は、全般的に活発であり、積極的に自分の意見・疑問を表現できる生徒が多い。特に学習課題が明らかであり、自分が追求すべき事柄が明確であるほど、積極的な取り組みを見せる。

海外に対する認識については、決して高いわけではなく、とりわけ異文化理解に関しては、積極性に欠ける面がある。海外の事柄に関しては、興味・関心を持つ生徒が多い反面、ある種の「誤解」を持ったまま学習してきた生徒もいる。特に、欧米中心の世界観が支配的であり、それ以外の国際関係を疎んじている傾向が強い。特に、発展途上国については、国々に対する認識が低く、「きたない」「おくらしている」「日本はすすんでいる」というように、先進国（特に日本）を優位な立場におくことが多い。

そこで、本学習を機会に、これからいっそう拍車がかかる国際化の進展の中で、他国・異文化の理解の重要性を認識し、それを尊重していく態度を自分たちで身につけようとする意欲を培いたい。

（2）教材の価値（視点1に関して）

この資料は、国際ボランティアに向けて、ガールスカウトの一員として、ピースバック（「子どもたちから子どもたちへの平和の小包」）を難民に送る活動をしていた生徒の作文である。活動の中で、主人公の中学生が異文化に対する理解を深めるとともに、難民に対するおごった気持ちを持っていることが素直な文章で表されている。

授業では、実際に生徒がピースバックの中身をどのようなものにするか提案を行う。しかし、その提案が、実は日本人である自分たちの価値観にもとづいて作られているものであることを気づかせていくとともに、世界の人の様子・考え方・価値観を知ることの大切さもこの教材を切り口にして学ぶことができると考えている。また、このことは、ふだんの自分の生活を振り返ったときに、家族、友人などとの関わりの中で、相手のことを考えて行動する・思いやるという行動にもつながり、生活の多くの場面で生かされるものであると考えている。

（3）指導にあたって（視点2に関して）

本授業では、ピースバックの中身をグループごとに考え、提案が行われ、さらに全体で望ましいピースバックの内容が話し合われていくことになる。このような問題解決の場面では、一人一人の考えや経験に基づいた価値観のぶつかり合いが起こる。問題解決の場面で価値観がぶつかり合った場合、自己の価値観にとらわれることなく、意見が対立する場面においても建設的に相手に気を配りながら対処して行くことが大切になると考える。このことは生徒が日常生活を送る上で、または今後、国際社会を生きる上でも大

切な能力の一つになる。そのような意味でも他者と関わりあう活動場면을積極的に授業に取り入れ、相手を理解しようとする意識、自己と他者を尊重していく意識を育成していきたい。

4. 指導計画

時数	学 習 内 容	評価規準（国際理解教育にかかわって）	他領域との関連等
1	・アフガン難民の子どもたちの実態を知るとともに、どんな「贈り物」をしたらいいか考える。	・アフガン難民の実態を理解するとともに、グループによる共同作業（話し合い活動）を通して、「贈り物」の内容を考えることができる。（社会科との関連）	
2 本 時	・国によって考え方や、価値観が違うことを知り、相手への気配りや思いやりを持って行動して、いこうとする態度を身につける。	・「自分たちがいいこと」＝「相手もいい」という、自文化（自己の価値観）中心に陥らず、相手への気配りも大切であることを理解するとともに、日常生活における人間関係においても生かしていこうとする態度を身につける	

5. 本時案

(1) 本時の目標

- ・国によってものの感じ方や考え方が違ってても、同じ人間として認め合い、差別や偏見を持たずに接することができる態度を育てる
- ・自分の考えをしっかりと持ち、それを的確に相手に伝えるとともに、相手の考えを尊重し、新たに得られた考えを共有しようとする

(2) 本時の展開

学習活動・内容	教師の支援（○）／評価規準（＊）
◎学習の内容を確認する ・アフガンの難民の子どもに、どんな「贈り物」をしたらいいか考えよう ・大きな声で発表しよう。	○学習のポイントを説明する ・大きな声で、聞き取りやすいように発表しよう。 ・よく聴き、自分たちの提案と比較しよう。
アフガン難民の子どもに「贈り物」をしよう	
◎各グループから提案を行う	○発表の援助を必要に応じて行う ＊提案の内容を、各グループが協力し、その必要性も含めて提案することができる。

◎提案に対して意見交流を行う

- ・提案内容についての質問、必要性についての意見
「同じだ」「これは本当に必要?」「喜ぶかな?」

◎資料「小さな国際協力」の内容をつかむ。

- ・「筆者が心から日本人でよかったと思った」に注目
- ・筆者と同じことを考えた生徒は、挙手

- ・「笑顔だ」「うれしそう」「友だちといて、楽しそう」
「将来の夢、あこがれをもっているのでは?」
「日本人の偏見?」



彼らは幸せ?

◎ピースパックスの提案を振り返る。

- ・あらためて、どのような「贈り物」をしたらいいか考える。

◎日常の自分の生活にあてはめて考えながら、授業の感想にまとめる。

○提案全体をじっくり比較できるよう時間を確保する

- *自分の意見を的確に相手に伝えるとともに、
受容的な態度で、相手の意見を聞くことができる

○資料を範読する。

○簡単に理由を発表させる

○筆者があることをきっかけに、考えが変わったことを伝える。

アフガン難民の子どもの写真を提示

○資料の続きを読み、筆者の心の変容を説明する。

○自分たちがいいこと＝相手もいいという、自文化（自己の価値観）中心に陥らず、相手への気配りも大切であることを知らせる。

- *ピースパックス作りにとどまらず、友人や家族との関係においても、相手への気配りが大切であることを考える

小さな国際協力

平凡な中学生の私に、「国際協力」という問題は大きすぎて、いったいこんな私に何ができるだろうかと迷わずにはられません。しかし、平和があたりまえで、家があり、家族と仲良く暮らしている日本人のわたしが、六年前に始めて知った世界があります。そして、そこで苦しんでいる子どもたちのために、ほんのささいな国際ボランティアをした経験を紹介します。

所属していたガールスカウトでは、募金活動や清掃奉仕などの国内のボランティア活動のほかに、一年に一度、ピースバックというものを作成していました。ピースバックとは、生まれてこのかた自分の持ち物とよべるものを持たず、不自由な生活を強いられている難民の子どもたちを、少しでも明るくすることができたらどんなにすばらしいかという思いで、一九九四年に国連難民弁務官事務所とガールガイド・ガールスカウト世界連盟が協力して始めた「子どもたちから子どもたちへ」の平和の小包のことです。現在、日本のこの活動は、アフガン難民に集中しています。

このピースバックを作成するにあたって、重大な注意点がありました。まず、受け取る子どものことを考えて、中古品は入れないこと。また、宗教上のことを考えて人や動物が描かれているものは避けること。そしておもちゃの中にボールは入れないこと。

わたしは、この活動を行っていくたびに、アフガニスタンの子どもたちと日本人の子どもたちとの環境のちがいに、驚かされました。同じ地球に住んでいながら、物があふれているわたしたちと、「死」を意識して毎日必死で生きるアフガン難民の子どもたち。わたしはアフガン難民に生まれた子どもは、なんて不幸なのだろう、日本人でよかったと心から思いました。

ピースバックを受け取る難民の子どもたちの写真を見るまでは……。その写真には、送られたピースバックを大事そうに抱き、満面の笑みをしている子どもたちがいました。わたしたちに負けないくらい理笑顔で。そうです、難民の子どもたちだって、友達とおしゃべりが好きだろうし、ケンカもするはずです。将来の夢や憧れもあるはずです。わたしはどこかで、彼らを偏見の目で見ていました。アフガンの人々は幸せのはずがないと思い込んでいました。